

イギリスの文献学（フィロロジ）と 文献学者（フィロロジスト）——その3

網 代 敦

6 ローレンス・ノーウェル，ジョージ・ヒックス，ハンフリー・ウォンリー

イギリスの初期文献学者の代表がOld English scholarshipの先駆をなしたエゼルウォルドとエルフリックであるとするならば，そのscholarshipの礎を固めた次に注目すべき文献学者は16世紀から18世紀にかけて登場する次の三名であろう．その一人は，人文学者・古物研究家で『ベオウルフ写本』（*Beowulf Manuscript*）の所有者であったローレンス・ノーウェル（Lawrence Nowell, 1530-ca. 1570），二人目は神学・政治学上の論客であり中世ゲルマン学者でもあって，古英語とゴート語を中心とするいわゆるゲルマンの「北方諸言語」（septentrional languages）の比較文法などを扱った大著『古期北方諸語集：文法批評家と考古学者による』（*Linguarum Veterum Septentrionalium Thesaurus: Grammatico-Criticus et Archaeologicus*, 1703-05）²⁷の著者ジョージ・ヒックス（George Hickes, 1642-1715），三人目は英国の写本研究における規範を設定した古書体学者で写本カタログを製作し，ヒックスの『古期北方諸語集』の第二巻にそのカタログ*Librorum Vett. Septentrionalium, etc.*²⁸（以下，『カタログ』

²⁷ Oxsoniæ : E Theatro Sheldoniano, MDCCV.

と表記)をまとめたハンフリー・ウォンリー (Humphrey Wanley, 1672-1726) である。

ローレンス・ノーウェルは16世紀における最も初期のサクソニスト (Saxonist)であった。彼は特に法律に関する古英語の写本の収集に力を注いでいたが、単なる収集家だけではなかった。特に注目すべき点は、ノーウェルが初めて古英語のテキストに不完全ながらも本文批評 (textual criticism)の原則を導入したということである。彼の興味を引いたのはアルフレッド大王 (Alfred the Great, 849-899)の法に関するもので、先ずは一つの写本を筆写すると次は他の2, 3の写本からの異読を与え、最後はオリジナルのラテン語本文と照合しながら難読の部分や疑わしい部分を検討した。²⁹ 当時マシュー・パーカー (Matthew Parker, 1504-75)に代表される古英語のテキスト編纂の意図は、英国国教会が古英語の時代から確立した正当な教会であることを示すためであった。即ち、古英語の文献で述べられている宗教的教義(特にミサにおける聖変化)が国教会のそれと合致するということを強調するための宗教的動機から発したものであった。しかし、ノーウェルはそのような姿勢に立ち入らないもっと公平な観点よりテキストを取り扱ったのである。ここにはノーウェルのアングロサクソン語学者としての姿勢が見て取れる。

²⁸ 正式のタイトルは、*Antiquæ Litteraturæ Septentrionalis Liber Alter : seu Humphredi Wanleii. Librorum Veterum Septentrionalium, qui in Angliæ Bibliothecis extant, nec non multorum Veterum Codicum Septentrionalium alibi extantium Catalogus Historico-Criticus, cum totius Thesauri Linguarum Septentrionalium sex Indicibus.* (Oxsoniæ : E Theatro Sheldoniano, MDCCV)。(『古期北方語のもう一つの書：イギリスの図書館に存在する古期北方の書の、そしてまた他にも存在する多くの北方の古写本に関する歴史批評家ハンフリー・ウォンリーによるカタログ。北方諸語全集の六索引付き』)

²⁹ Helen Damico (ed.), *Medieval Scholarship : Biographical Studies on the Formation of a Discipline Volume 2: Literature and Philology* (New York and London: Garland Publishing, 1998), p. 11.

が、他方、彼の興味の対象はそれだけに留まらなかった。地形学、地図作成、ギリシャ・ラテンの古典文献などにも関心を向けたノーウェルは、カール T. バークハウト (Carl T. Berkhout in Helen Damico, 1998) の指摘に見られるように “a copious humanistic mind amassing a compendium of learning without bounds (p. 13)” であって、単に語学者という枠だけに規定されない学風を持っている。特に “a copious humanistic mind” ということは、対象を広い観点の人間的な興味の上から見ることであり、イギリス人の言語に対する基本的姿勢がこのノーウェルの中にも探ることができるであろう。

次にジョージ・ヒックスを見てみよう。ヒックスは英国国教会の聖職者であったが、名誉革命 (1688) の際にウィリアム三世 (William III) とその妃メアリ二世 (Mary II) に臣従の宣誓を拒否し、臣従宣誓拒否者 (Non-juror) となった。そのため不遇な年月を送ることになったが、その状況下でも着々とフィロロジカルな研究を進めていた。彼もまたノーウェルと同じように研究の出発点を古英語から始めている。そして1689年『アングロサクソン語とモエシアゴート語文法の手引き』 (*Institutiones Grammaticæ Anglo-Saxonicæ et Maso-Gothicæ*) を出版した。これは、その後大著として現れる『古期北方諸語集』の一部としてその下地となったものである。かのイギリスの歴史家トマス・バビントン・マコーレー (Thomas Babington Macaulay, 1800-59) は、『ジェームズ二世の即位からの英国史』 (*The History of England from the Accession of James the Second, 1855*) 中のヒックスについて言及した箇所、彼が言語のみに目を向けていたわけではなく宗教文学にも広範囲に通じていたことを指摘している。³⁰ この場合の宗教文学とは、教父文学 (Patristic literature) のことで、ヒックスの神学の根柢はこれに基づいている。³¹ この言語研究と神学の結びつきは象徴的にイギリスの文献学の個性を表していると言

えないであろうか。ヒックスは単に歴史家、語学者、あるいは神学者として、個々の独立した領域をばらばらに考えていたのではなく、総合的な広いヴィジョンを持って文献に臨んだのである。デイヴィッド・C・ダグラス (David C. Douglas, 1939) の次の言葉は、ヒックスが言語研究をどのように考えていたか、端的に指摘したものである。これを見れば彼のヴィジョンというものが理解されよう。

Hickes brought his study of language to bear upon every department of Anglo-Saxon life and culture, and an improved mastery of Anglo-Saxon opened the door to a fresh understanding of the whole Old English past.
(p.91)

さて、ヒックスと言えば、その大著『古期北方諸語集』に触れないわけにはいかない。これはヒックスにとって言語研究の集大成であり、その構成を辿れば彼の総合的な研究の展望を知ることができる。次に提示した『古期北方諸語集』の各構成を追いながら、言語研究において示したヒックスのヴィジョンの一端を見てみよう。

第一巻の一：

献辞 (Dedicatio)

序文 アダム・オットリー師³²に宛てて

(Præfatio: Ad Reverendum Virum Adamum Ottley)

³⁰ “Of all the Englishmen of his time he was the most versed in the old Teutonic languages; and his knowledge of the early Christian literature was extensive.” Thomas Babington Macaulay, *The History of England from the Accession of James the Second*, vol. III (London: Longman, Brown, Green, and Longmans), 1855, p.458.

³¹ David C. Douglas, *English Scholars 1660-1730* (London: Eyre & Spottiswoode, 1939), p.82.

I (Pars Prima) :

アングロサクソン語文法とモエシアゴート語文法の組織 :

ジョージ・ヒックス著

(*Institutiones Grammaticæ Anglo-Saxonicae, & Mæso-Gothicæ* :
auctore Georgio Hiccesio)

II (Pars Secunda) :

フランク語文法の組織 : ジョージ・ヒックス著

(*Institutiones Grammaticæ Franco-Theotiscæ* : auctore Georgio
Hiccesio)

第一巻の二 :

III (Pars Tertia) :

アイスランド語文法入門 : アイスランド人ルノルフ・ヨンソ
ン³³による . ジョージ・ヒックスの補足と解説用例付き

(*Grammaticæ Islandicæ Rudimenta* : per Runolphum Jonam
Islandum, cum Gerogii Hiccesii Additamentis aucta et Illustrata)

IV (Pars Quarta)³⁴ :

(1) 古期北方語の有用性について, あるいは古期北方方言の用法に
ついて : バーソロミュー・シャワー³⁵に宛てた書簡による論文

(*De Antiquæ Litteraturæ Septentrionalis Utilitate, sive de Linguarum
Veterum Septentrionalium Usu* : *Dissertatio Epistolaris, Ad*

³² Adam Ottley. Hereford (Hereford) の司教座聖堂参事会員 (Canon), のち St. David's の主教となりヒックスに財政上の援助を与えた.

³³ Runólfur Jónsson.

³⁴ Pars Quarta の表示は本書にはないが, 本稿では統一の意味でこのように記した.

³⁵ Sir Bartholomew Shower (1658-1701). 1687年, ジェイムズ二世 (James II) によりナイトの爵位を受け, 翌年ロンドンの市裁判官となる. ヒックスと書簡のやり取りがあり, 政治面において彼と意見を同じくしていた.

Bartholomæum Showere)

(2) アングロサクソンとアングロデンマークの古銭概略：アンドリュー・フォンテイン³⁶による

(Numismata Anglo-Saxonica & Anglo-Danica Breviter Illustrata :
ab Andrea Fontaine)

第二巻：

ハンフリー・ウォンリーによる序文：最も名声高く最も著名な助力者，ロバート・ハーレー伯爵³⁷に宛てて

(Humfredi Wanleii Præfatio : Ad Amplifissimum & Illustrissimum
Virum Robertum Harley Armigerum)

I 写本・活字本両者における北方地域の書のカatalog

(Catalogus Librorum Septentrionalium tam Manuscriptorum quam
Impressorum)

II 著述の全索引

(Indices Totius Operis)

ヒックスが意図したことは、アングロサクソン語、即ち古英語の組織を解明し、古英語の「北方諸言語」(septentrional languages)の中での正当な位置付けを試みようとした比較言語学 (comparative philology) であった。これは、19世紀におこった科学的な比較言語学 (comparative linguistics)とは趣旨が異なるものである。考古学的な要素の古銭学、アングロサクソンの諸写本のカatalogを他の協力者の力を借りて組み入れ

³⁶ Sir Andrew Fontaine (1676-1753). 美術品愛好家。磁気、絵画、書籍などを収集したが、その中に古銭も含まれていた。ヒックスから古英語の教えを受けた。

³⁷ Robert Harley (1661-1724). 最初のオックスフォード伯爵 (Earl of Oxford)。トーリー党员。大蔵大臣など政治の要職を務める。文学愛好者で、膨大な写本類を収集した。その写本類の整理とハーレー文庫 (the Harleian Library) の保管を任されたのがハンフリー・ウォンリーである。

たところは、「古代アングロサクソン学」を確立しようとした一つの試みであったと言えよう。もちろん、古銭学のみが言わば唐突的に取り入れられたという一貫性のなさが感じられないこともなくはない。しかしながら、特にDissertatioにおいては、それまでの広範な言語研究がアングロサクソンの歴史原典の調査と結びついて、その分野に新しい光を投じている³⁸ことを考慮すれば、ヒックスの意図したヴィジョンがどのようなものであったかが見えてくることだろう。

最後に三人目のハンフリー・ウォンリーに触れよう。ハンフリー・ウォンリーの興味の第一歩も古物研究からであった。中でも特に関心があったのは、写本研究である。1695年から翌年までの間ボドレアン図書館にポストを得ると、彼は古英語で書かれた写本、あるいは古英語で書かれたものを含む写本のカタログ化に着手した。その後1699年から1700年までの間、イングランドの各所に存在する古英語写本の調査のために、ヒックスに雇われることになった。これが結実して包括的な古英語写本の『カタログ』となり、ヒックスの『古期北方諸語集』の第二巻目を構成している。この『カタログ』は、現代の古文書学の第一人者、ニール・リプリー・ケア (Neil Ripley Ker, 1908-82) が著したカタログ³⁹の先駆けとなるものであり、写本研究の基準を設定したと言ってもよいであろう。この業績が高く評価され、ヒックスの紹介を通してロバート・ハーレー伯爵の蔵書の管理と、のちのハーレー文庫設立に寄与することになったのである。ここでウォンリーのこの『カタログ』中の一つ、「コットン文庫におけるアングロサクソン古写本のカタログ」(Catalugus Cod. MSS. Anglo-Saxonicorum Bibliothecæ Cottonianæ, pp. 183-265)⁴⁰に

³⁸ Douglas (1939), p. 91.

³⁹ *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon* (Oxford: The Clarendon Press, 1957).

記載された『ベオウルフ』(Beowulf, 8c) の項目⁴¹を覗いてみよう。

III. *Inventarium bonorum existent. in officio Refectorii per decessum D. Alicia Prefum. A. D. 1420. O.S. 16.*

servanda, Latine. manu recentiori.

VI. *Ejusdem tractatus verso Gallica sive Normanno-Gallica eadem manu.*

Hic codex quondam fuit peculium Tho. Aleni Oxoniensis, quod cum multis aliis melioris notæ Codd. MSS. D. Rob. Cotton. dono dedit.

VITELLIVS. A. XV. *Cod. membran. ex diversis simul compactis constans, in quo continetur*

I. *Nota de numero Parochiarum, villarum, feodorum & Militum in Anglia, & de expugnatione Caleti per Edwardum III.*

II. fol. 1. *Flores ex libro Soliloquiorum D. Augustini Hipponens. Episc. Selecti & Saxonice versi per Ælfredum Regem. Tractatus iste quondam fuit Ecclesie B. Mariae de Sarwika, ut patet ex fol. 2. litteris Normanno-Saxonice, post Conquestum scriptus.*

III. fol. 57. *Pseudo-Evangelium Nicodemi, capite mutilum; cujus exemplaris variantes Lectiones apographo suo ex Cod. Cantabrigiensi descripto, attexit cl. Junius, ut videre est, pag. 96.*

IV. fol. 83, b. *Hep kīð. hu Saturnuþ and Saloman rettoþe ymbe heora þætcom.*

Incip. Ða cƿæt Saturnuþ to Salomane. Saga me hƿer God sete þa he geroþhte heofonas 7 eor-

COTTONIANÆ, APUD WESTMONAST.

219

lan geongum 7 ealþum sƿýlc him Gob sealde buton folc seape 7 reorþum gumena.

In hoc libro, qui Poeseos Anglo-Saxonice egregium est exemplum, descripta videntur bella quæ Beowulfus quidam Danus, ex Regio Scyldingorum stirpe Ortus, gessit contra Sueciæ Regulos.

X. fol. 199. *Fragmentum Poeticum Hist. Judithæ & Holofernis, Saxonice ante Conquest. scriptum. Quod descriptit cl. Junius, & cujus Apographo illud typis edidit Edwardus Thwaitesius, in libro suo supra laudato.*

can. Ic ðe sete he setc ofer sinda sæþerum. Espl. On xii. moðum þu sealt sýllan þinon þeoran men. vii. hund hlafa. 7. xi. hlafa. buton monge metten. 7 non-mettum.

IX. fol. 130. *Tractatus nobilissimus Poeticè scriptus. Prefationis hoc est initium,*

Hƿæt se gande na. in gearþ dagum. þeod cýnunga þrým gefrumon hu ða Æþelingas ellen sƿemetton. Ofc Scýlb Sceþing seceþena ðreatum monegum mægðum meoþo setla ofteah egrþe eorl sƿýðan æret searð searceft sunben. he sæt sƿoþre gebæd seox unben solcum seorðmyndum þah. oð þ him æghƿýlc þara ýmb suttentþa ofer hron nate hýpan seolbe gomban gýlþan þ sæt god Cýnung. ðæm eafesa sæt æfter eanþe geong in gearþum þone Gob seude folce to sƿoþre. sƿýþe ðearse on geat þ he ær þruþon alþon --- aþe. lange hƿýlc him sæt luf sƿea sƿulþes sealtens seolþe aþe searþe. Beorulf sæt þreme Blæþ sýþe sƿrang Scýlþes eafesa seude landum in.

Initium autem primi Capituli sic se habet,

Ða sæt on þungum Beorulf Scýlþinga leof leob Cýning longe ðrege solcum sefnege seþer eilþon hƿearf alþon of earþe oþ þ him est on sece heah healf Dene heolþ þen þen lufþe gamol 7 guðreouþ glæþe Scýlþinga ðæm seoper bearn seorð gefrimþe in seolþe seolþe seorþe searþe Heorþan. and Hroðgar 7 Halgat il hýþe ic þ helan cpen. heaðo Scilfþinga healf seþeþe þa sæt Hroðgarne here sƿeþ sƿýþe searþe seorðmynd þ him hýr sýne mægþ seorþe hýþon oðþ þ seo seorþe searþe mægþ searþe micel hum on moþ bearn þ healf seceþe batan seolþe. meoþ ærþ micel men searþeþe þone ýlþo bearn æþre gefrumon. 7 þær on unnan eall geþe-

lan

218頁のIX. の箇所には、『ベオウルフ』写本のフォリオ (fol.) 130——
現在は fol. 129r. となっている——と番号付けされた部分が転写されて

⁴⁰ Anglistica & Americana 64, rpt. (Hildesheim, New York: Georg Olms Verlag, 1970).

いる。「これは、韻文化された最もすぐれた作品である。ここにその前口上が始まる (*Tractacus nobilissimus Poeticè scriptus. Præfationis hoc est initium*)」という一文に続く『ベオウルフ』本文は、現在の刊行されている校訂本の1-19行目までに相当する本文が最初に与えられている。続いて、「一方、第一部の開始部はこのようになっている (*Initium autem primi Capitis sic se habet*)」と記した後に、53-73行までの本文が転写されている。さらに最後にウォンリーは『ベオウルフ』の内容に関して、「アングロサクソン詩の卓越した一例であるこの書には、系統上スキュルド族の王国出身のベオウルフとかいうあるデンマーク人が、スウェーデンの諸王に対して行った戦いが述べられているようである (*In hoc libro, qui Poeseos Anglo-Saxonice egregium est exemplum, descripta videntur bella quæ Beowulfus quidam Danus, ex Regio Scyldingorum stripe ortus, gessit contra Suecice Reglos.*)」と短い解説を施している。ウォンリーのこの転写は、何点か誤記が認められ、また語分割、語結合における形態素の取り違いなどの不備が見られる。また内容の解説から判断すると正確に内容を読み取っていたとは考えられない。しかしながらそのような欠点は見られるものの、写本本文の転写に関してはかなりの点において正しく書き取っていたことが判断される。この『カタログ』の意義は、後世に対して、古書体学 (paleography) と写本学 (codicology) という文献学

⁴¹ スウェーデンの神学者でのちにウプサラ (Uppsala) の大監督になったエリック・ベンゼリウス (Erik Benzelius, 1675-1743) に宛てた、1704年8月28日付けの手紙の中で、ウォンリーは『ベオウルフ』の発見の報告をしている。

“... I cannot forbear to acquaint you, that some years ago I found a Tract in the Cottonian Library (omitted in Dr Smiths Catalogue) written in Dano-Saxon Poetry, and describing some Wars between Beowulf a King of the Danes of the Family of the Scyldingi, and some of your Suedish Princes.” P. L. Heyworth (ed.), *Letters of Humfrey Wanley: Paleographer, Anglo-Saxonist, Librarian 1672-1726* (Oxford: Clarendon Press, 1989), p. 239.

の一分野をイギリスにおいて確立した点にある。そもそものウォンリーの興味の対象は“antiquary”であるが、ミルトン・McC.・ガッチ (Milton McC. Gatch in Helen Damico, 1998) の言葉を借りれば、彼にとってこれは、“the study of the past and the documentation of the past using all available evidence from the history of language (pp. 46-7)”であった。ここでは「言語の歴史」という点が重要である。語学と歴史が結びついたイギリス的な文献学の要素が、このウォンリーの視点の中に見られるであろう。

中世文献学の出発点は、写本を収集し、それを転写し、制作年代の設定をし、種々の写本の内容記述を行い、カタログ化する。そしてさらには本文校訂をなし刊本化する。これが根本の第一歩であろう。次にここから様々な本文批評が始まり、テキストが決定化され、さらにそのテキストを土台に諸研究が学際的に広がっていくことになる。まさにこの基礎を築いたのがこれら三人である。

7 トマス・ウォートンの文献学的著書——『英詩の歴史』

オックスフォード大学の詩学教授 (Professor of Poetry)、続いてキャムデン歴史教授 (Camden Professor of History) となり、また1785年に桂冠詩人ともなったトマス・ウォートン (Thomas Warton, 1728-90) は、ロマンティック・リバイバルの気運の中で現れてきた文学者である。彼の『英詩の歴史：11世紀末から18世紀初頭まで』(*The History of English Poetry, from the Close of the Eleventh to the Commencement of the Eighteenth Century*, 3 vols.)⁴²は、イギリス最初の詩史⁴³である。この書は、あまり

⁴² London: 1774, 1778, 1781. 4巻目も出版される予定であったが存命中に完成することはなかった。現筆者が使用したものは、第二版の vol. I (1775) である。

にロマンティックすぎるとサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) から批判されたり⁴⁴, 記述が「緩慢でしばしば学問上の根拠がぞんざい」(“dilatatoriness and often slipshod scholarship”)⁴⁵との批判を受けたりした。確かにそういう点は認められるものの、その反面ウォートンが目指したこの詩史は、単なる英文学史的な著述にとどまらないもっと広いパースペクティブを持ったものとなっている。ここにいわゆる文献学的な要素が含まれていると言える。その要素とは、次のような事柄である。この書の第一巻には二つの巻頭論文が置かれている。この二つとは、1. 「ヨーロッパにおけるロマンティック小説の起源について」(On the Origin of Romantic Fiction in Europe), と2. 「イングランドへの学問の流入について」(On the Introduction of Learning into England) である。特に2. はイギリスの詩史を述べるにあたって、その源流となる学問の流れを広い観点から追ったものとして注目に値する論文である。またもう一つは、本論の冒頭で英語の言語的变化に対しての記述が成されている点である。ここには文学と語学の接点を見出そうとするウォートンの姿勢が読み取れる。

巻頭論文2. の内容について簡単に触れてみよう。ここでのウォートンの視点は二つある。一つは、ギリシャ・ラテンの文化が北方民族の侵攻によって破壊され、その諸文献にも惨禍が降りかかったのち、これら

⁴³ アレクサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) やトマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-71) とも英詩の歴史の書を著そうとしたが、実行には移されなかった。グレイは自分の骨子をウォートンに送ったが、ウォートンの詩史には何も反映されなかった。Sidney Lee (ed.), *Dictionary of National Biography* (London: Smith, Elder, & Co., 1908-), ‘Warton, Thomas’ in vol. xx.

⁴⁴ 齊藤勇『思潮を中心とせる英文学史』第三版 (研究社, 1928), p. 216.

⁴⁵ David Matthew, *The Invention of Middle English: An Anthology of Primary Sources* (Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 2000), p. 19.

破壊された文化・文献の学問的復活に貢献したのはアラビア人であったことを述べている。特に彼らによるギリシャ哲学者の文献の翻訳が、ラテン語に翻訳されることを通して西洋世界に広く知れ渡る足がかりを作ったことの重要性を指摘している。もう一つは、イングランドにおける13世紀ごろまでの文学の発展と、それに貢献した人たちのギリシャ・ラテン語文献との関わりが述べられている。例えば初期においては、アルドヘルム (Aldhelm, 640?-709 or 710), ケオルフリッド (Ceolfrid or Ceolfrith, 642-716), ヨークのアルクイン (Alcuine or Alcuin of York, c. 735-804), ビード (Bede, c. 673-735), アルフレッド大王 (Alfred the Great, 871-899) などを代表的人物として挙げている。これらの者は皆、文献学に携わった学者であった。アルドヘルムについては、ある年代記編纂者の次のような記述をウォートンは引用している。“He was an excellent harper, a most eloquent Saxon and Latin poet, a most expert chantor or singer, a DOCTOR EGREGIUS, and admirably versed in the scriptures and the liberal sciences.” (Disser. II)⁴⁶ またアルクインに関しては、“Homilies, lives of saints, commentaries on the bible, with the usual systems of logic, astronomy, rhetoric, and grammar, compose the formidable catalogue of Alcuine’s numerous writings.” (Disser. II) とその広範で学際的な性格を指摘し、ビードについては“philological studies” (Disser. II) のフレーズを用いて記述を成している。この頃のイングランドにおいては、ウェルギリウス (Vergilius, 70B. C. -19B. C.), プルデンティウス (Prudentius, 348-410), ボエティウス (Boethius, 480-524), オロシウス (4c. 末-5c.) といったラテン語文献作家の影響力の強さに言及している。12世紀を過ぎると、

⁴⁶ Dissertation II. はI. と同様に頁が付けられていないので、引用の表示はDisser. II とのみ記す。

テレンティウス (Terentius, 195 B.C.?- 159 B. C.), スエトニウス (Suetonius, 70?- 122), セネカ (Seneca, 4 B. C. - 65), マルティアリス (Martialis, 40?- 104?), リウイウス (Livius, 59 B. C. - 17) などの転写本や本のカタログが残されていることを示した。この時代のイングランド作家として、モンマウスのジェフリ (Geoffrey of Monmouth, 1100?- 1154), ソールスベリーのジョン (John of Salisbury, c. 1115- 80), マームズベリーのウィリアム (William of Malmesbury, c. 1090-1143?) といった歴史家・年代記作家, 哲学者が挙げられている。その中にフィロロジストであり文法家でもあるアレクサンダー・ネッカム (Alexander Neckham or Neckam, 1157-1217) のような人物が掘り起こされて加えられている点は, ウォートンの文献学的嗜好が見て取れるであろう。

次に, 本論の導入部 (pp. 1-7) について簡単に触れることにしよう。本書は英語の詩史でありながら, ここではウォートンは英語における言語変化の本質について, 独自の見解を与えている。彼は時代とともに英語 (ウォートンは 'the Saxon language' と述べている) を次のような三つの方言に区分している。

- (1) the British Saxon : (サクソン人がイングランドに入ってきたときからデーン人の侵攻に至る 330 年間の英語)
- (2) the Danish Saxon : (デーン人の侵攻からノルマン人の侵入までの英語)
- (3) the Norman Saxon : (ノルマン人の即位からヘンリー二世の統治時代を過ぎての英語)⁴⁷

⁴⁷ Warton, vol. I (1775), pp. 1-2.

このうち、ウォートンは the Norman Saxon を “a language extremely barbarous, irregular, and intractable” (p. 2) と捉えた。その理由は、統一した語形に基づき、かつ詩人や神学者たちによって磨かれた言語である英語 (the Saxon) がデーン人により乱されたとはいえ、それでもなお “perspicuity, strength, and harmony” (p. 2) を保持していたのが、ウィリアム征服王 (William the Conqueror, 1027-87) とその臣下たちによりもたらされたフランス語によって統一のない粗雑な言語とされてしまったと考えたからである。⁴⁸ 英語史の立場から言えば、フランス語、正確にはノルマンフランス語 (Norman French) との言語接触によって書記法が変化し、そのため英語は綴りと発音の乖離が認められるようになったものの、ノルマンフランス語からの多様な語彙借用を受けそれが英語の資質を潤沢にしたという利点も指摘される。よってウォートンの見解は誤解の面もあるが、一概に妥当ではないと言い切ることもできない。その点を考慮しながらこの詩史を見ると、これは後期中英語から初期近代英語に至る多様な諸作品を提示しながら、諸作家によって英語がどのように改良されていったかを追究した文献学的大作であることがよく理解できる。

8 18世紀から20世紀にかけての文献学者

18世紀以降イギリスは数多くの有名な文献学者を輩出した。注29で触れたヘレン・デイミコ編 (Helen Damico, ed.), 『中世学：学問形成の伝記的研究, 巻2, 文学とフィロロジーの場合』 (*Medieval Scholarship : Biograph-*

⁴⁸ 続けてウォートンはこのフランス語をこのように記述している。 “the French … was a confused jargon of Teutonic, Gaulish, and vitiated Latin.” (p. 2).

ical Studies on the Formation of a Discipline Volume 2: Literature and Philology) に登場するイギリスの文献学者に絞って、ここでは簡単にこれら研究者の足跡に触れておこう。⁴⁹ 最初の女性アングロサクソニストでエルフリックの『カトリック説教集 I・II』 (*Catholic Homilies* I, c. 990; II, 993-4) の校訂本の出版 (1715) という貴重な貢献をなしたエリザベス・エルストブ (Elizabeth Elstob, 1683-1756)、ドイツやデンマークの学者、特にラスムス・ラスク (Rasmus Rask, 1787-1832) に啓発され従来のフィロロジーの立場に比較言語学に基づく科学的研究アプローチを導入した古英語学者ベンジャミン・ソープ (Benjamin Thorpe, 1782-1870) とジョン・ミッチェル・ケンプル (John Mitchell Kemble, 1807-1857)、初期英語テキスト協会 (Early English Text Society) を創立し古英語・中英語の未刊の稿本を刊行するのに尽力をなしたフレデリック・ジェイムズ・ファーニバル (Frederick James Furnivall, 1825-1910)、中英語の深い研究と語源辞典で名の知れ渡ったウォルター・ウィリアム・スキート (Walter William Skeat, 1835-1912)、シェイクスピア (Shakespeare, 1564-1616) がその影響下で書いた中世期の文学上・演劇上の諸状況がいかなるものであったかをまとめた二巻からなる『中世の劇壇』 (*The Mediaeval Stage*, 1903) を書き、さらには抒情詩・演劇・サー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory, 1400?-71) を中心とした中世期英文学作品を考察した著書もあるエドモンド・カーチェバ・チェインバーズ (Edmund Kerchever Chambers, 1866-1954)、古英語・中英語・音声学の分野においては19世紀イギリスの第一人者として認められるもオックスフォード大学では不遇な地位にあったヘンリー・スイート (Henry Sweet, 1845

⁴⁹ この書の書評を *Asterisk: A Quarterly Journal of Historical English Studies* (イギリス国文学協会編, Vol. XI, No. 2, 2002), pp. 1-8 に発表した。その際の pp. 3-4 の原稿に基づき、一部補足したものをここに転載した。

-1912), ブレトン人の物語作家がヨーロッパ中にアーサー王物語を持ち込み, 多くのウェールズの伝統が11世紀初期にブリタニーの地に届いたこと, そしてこの物語が敷衍され12世紀初めころまでにウェールズ人が再びブレトン風に脚色された自分たちの伝説・英雄を受け入れ直したというアーサー王伝説群が, ケルト起源であるという理論で知られる日本生まれのロジャー・シャーマン・ルーミス (Roger Sherman Loomis, 1887-1966), 文学理論に傾倒することなく, 広範なテクストを読むことを通し経験的にものを考え, それによって中世・ルネサンスの文学を解釈し, 愛・恐怖・想像・自然観といった感情を表す語の重層的な意味のイメージを歴史的コンテクストにおいて考察した文献学者であり, またジョン・ロナルド・ルーアル・トルキーン (John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973) らと親交を結び 'the Inklings' という文学クラブを結成し自らの文学作品を発表したクライブ・ステイプルズ・ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963), 古書体学・写本学・書誌学において徹底的な研究・調査をなし "the New Wanley" と呼ばれ, アングロサクソン期の写本研究者には欠くことのできない写本カタログ, 『アングロサクソンを含む写本カタログ』 *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon* (1957) の著者ニール・リプリー・ケア (既出), 中世の宗教詩・宗教演劇の総体的な研究をなし, 特に宗教抒情詩に関してはそのジャンルの包括的かつ体系的記述の書『中世期におけるイギリス宗教抒情詩』 *The English Religious Lyric in the Middle Ages* (1968) を著し, またアングロサクソン文学に現れる諸聖人を扱った論文など幅広い論を展開した, その早世が惜まれるローズマリー・ウルフ (Rosemary Woolf, 1925-1978), これらの研究者が18世紀以降のイギリスの中世学を形成し, かつ文献学の発展に大きな貢献をなしてきたのである。

9 J. R. R. トルキーンとフィロロジー

一つは古英語・中英語の研究者として、もう一つは『ホビット』(*The Hobbit*, 1937) や『指輪物語』(*The Lord of the Rings*, 1954-55) といった作者としての顔を持つJ. R. R. トルキーンは、いわゆる語学を文学や歴史と結びつけたイギリス的な文献学を遂行した代表的人物である。トルキーンがこの「語学」と「文学」の結びつきをどのように考えていたかを知るには、彼がオックスフォード大学の教壇を去るときに行った最終講演⁵⁰に耳を傾けるのがよいであろう。

The right and natural sense of Language includes Literature just as Literature includes the study of the language of literary works. *Litteratura*, proceeding from the elementary sense “a collection of letters; an alphabet”, was used as an equivalent of Greek *grammatike* and *philologia*: that is, the study of grammar and idiom, and the critical study of authors (largely of linguistic kind). Those things it should always still include. But even if some now wish to use the word “literature” more narrowly, to mean the study of writings that have artistic purpose or form, with as little reference as possible to *grammatike* or *philologia*, this “literature” remains an operation of Language. Literature is, maybe, the highest operation or function of Language, but it is nonetheless Language. (pp. 25 - 6)

Language, すなわち「語学」の本来の意味は Literature 「文学」を含む

⁵⁰ J. R. R. Tolkien, ‘Valedictory Address to the University of Oxford, 5 June 1959’ in *Scholar and Storyteller*, ed. Mary Salu and Robert T. Farrel (Ithaca and London, 1979), pp. 16 - 32.

ことである、そして「文学」は文学作品における言語研究を含むことである、というのがトルキーンの信念であった。これはオックスフォード大学におけるフィロロジの伝統である。トルキーンの次の言葉からさらにそれが理解される。

Only *one* of these words, *Language* and *Literature* is therefore needed in a reasonable title. Language as the larger term is a natural choice. To choose *Literature* would be to indicate, rightly as I think, that the *central* (central if not sole) business of Philology in the Oxford School is the study of the language of literary texts, or of those that illuminate the history of the English literary language. (p.26)

また、オックスフォードのフィロロジは「英語で書かれた文学語の歴史を解明すること」にもあるという点で、史的研究が深くフィロロジに関わることに注意を払っておきたい。「歴史」という背後には、必ず人間の顔が存在するからであり、ここがイギリス的要素であると考えられるからである。

このトルキーンが「語学」と「文学」の融合を実践したのが、作品『指輪物語』(*The Lord of the Rings*, 1954-55) 自身においてであった。1918年末から1920年の春までトルキーンは*OED* (or *NED*) の編集に携わり、'wag', 'walrus', 'wampum', 'warm', 'wasp', 'wick (lamp)', 'winter' などの語を調査した経験を持っている。⁵¹ 文献学の一集大成とも言えるこの*OED*の語釈に関して、トルキーン自身はその不備や間違いの指摘とその

⁵¹ Wayne G. Hammond, *J. R. R. Tolkien: The Descriptive Bibliography* (Winchester: St Paul's Bibliographies, 1993), p. 278.

批判を、『指輪物語』の作品自身の中で実践しようとしている。このことに関しては、T. A. シッピー (T. A. Shippey) がその論文で⁵²面白い論を展開している。例えば‘dwarf’という単語を取り上げ次のような指摘をしている。OEDでは‘dwarf’の語釈は、“1. A human being much below the ordinary stature or size; a pygmy. b. One of a supposed race of diminutive beings, who figure in Teutonic and esp. Scandinavian mythology and folk-lore; often identified with the elves, and supposed to be endowed with special skill in working metals, etc.”である。がこれに対してトルキーンは異議を唱えている。‘dwarf’は‘short’ではあるが‘diminutive’ではないこと、‘elves’とは基本的に異質であること、‘dwarf’の説明に用いられた(a) ‘supposed’ (race) といった「ぼかした軽視的な言い方」と「くっきりと描かれるファンタジーの世界」との対応の格差など、トルキーンにとっては我慢がならない解釈であった。トルキーンが‘dwarf’の複数形に現代の語形(‘dwarfs’)を用いるのを意識的に避け、古語の‘dwarrows, dwerrows’を使用するのに拘ったのも、神話学に対する不十分な概念しか持ち得ない現代の解釈への抵抗を示すものであった。⁵³シッピーのこの一つの指摘から何が言えるかといえば、トルキーンは作品を創作するにあたって、OEDの記載事項を丹念に読みながら執筆したということである。換言すると、トルキーンのフィロロジは具体的事実に興味を置きながらの「語学」と「文学」の融合なのである。

⁵² T. A. Shippey, ‘Creation from Philology in The Lord of the Rings’ in *Scholar and Storyteller*, (1979), pp. 286-316.

⁵³ T. A. Shippey, p. 289.

10 R.W. チェインバーズとフィロロジ

『ベオウルフ』の手引書やトマス・モア (Thomas More, 1478-1535) の伝記など、幅広い著述を行ったロンドン大学のユニヴァーシティ・コレッジ (University College) のレイモンド・ウィルソン・チェイムバーズ (Raymond Wilson Chambers, 1874-1942)⁵⁴ が、その著作の一つ『人間の不屈の精神』(*Man's Unconquerable Mind*, 1939)⁵⁵ という論文集の中で、彼が捉える文献学についてこのように述べている。

In English, the word Philology is ambiguous: it was once used, in its widest sense, for a love of all polite literature; it included 'all humane liberal studies'. Even when used in a narrower sense, Philology was wont to cover the study of literature, just as much as of grammar. But nowadays Philology is often limited to comparative grammar, and to the science of linguistics which is based upon it.

Now, in speaking of Philology at University College, I wish to use the word in the older, broader, and more correct sense, including the study of literature as well as the study of language. University College was the first

⁵⁴ チェインバーズの著作を数点挙げる。 *Beowulf: An Introduction to the Study of the Poem with a Discussion of the Stories of Offa and Finn* (Cambridge: Cambridge U. P., 1921). 2nd ed., 1932; 3rd ed., 1959 with a Supplement by C. L. Wrenn. / *Thomas More* (London: Jonathan Cape, 1935). / *The Place of St. Thomas More in English Literature and History* (London: Longmans, 1937). / *England before the Norman Conquest* (London: Longmans, 1926). / "The Teaching of English in the Universities of England" (The English Association, Pamphlet No. 53, 1922). / "More's 'History of Richard III'" (*The Modern Language Review*, Vol. XXIII, No. 4, 1928, pp. 405-423). / *On the Continuity of English Prose from Alfred to More and his School* (London: Oxford U. P., EETS OS191^A, 1932).

⁵⁵ London: Jonathan Cape, 1932: rpt., 1952.

place in England where chairs were established in the Language and Literature of England and of other modern countries; and within these walls the study of language has never been divorced from the study of literature.(p.342)

特にチェイムバーズが所属したユニヴァーシティ・コレッジを通して見たイギリスのフィロロジの姿は、イギリスらしい文献学のありようを最もよく表している。すなわち、「文学研究」と「語学研究」の融合⁵⁶であり、歴史的研究に注意を払いながら人間一個人の言葉・思想・行動を、またテキストの言語実態を浮き彫りにしようとした点にその本質がよく窺われる。まさしく“all humane liberal studies”である。チェイムバーズ自身もこれを実践した。彼のモア伝『トマス・モア』(1935)は、言うなれば言語学的な緻密さの手法のようにモアの生き方の信念を描き出したものであり、また『人間の不屈の精神』の中で述べられる作品の『ベオウルフ』や『農夫ピアズ』(*Piers Plowman*, 14世紀後半)では「精神において、韻律において、さらには語彙において」(p.15) アングロサクソン人の英雄的な精神が後世にも連綿と引き継がれていることを指摘したものである。また『英語散文の連続性について—アルフレッドからモアとその一派まで—』(1932)は、アルフレッドを出発点としてエルフリックから『女子修道院の戒律』(*Ancrene*

⁵⁶ C. L. Wrenn はチェイムバーズに関し、次のように言っている。“Chambers saw an essential unity of spirit in English literature throughout. Teaching in this College (i. e. University College), where the Philological Society was founded and nourished, he always upheld that now antiquated conception of English philology as a unity which should embrace alike medieval and contemporary studies, linguistic and literary.” *Anglo-Saxon Poetry and the Amateur Archaeologist: The Chambers Memorial Lecture* (London: H. K. Lewis, 1962), p. 24.

Riwle, 1200頃) などを経て, トマス・モアとその一派までの散文は連続していることを実証的に証明しようとした。連続性ということに関しては, さまざまな異論・反論が提示されているが, 言語事実に沿ってテキストを精読しながらの方法論はチェインバーズの文献学的アプローチの真骨頂と言える。ここには文献学の一要素でもある歴史的視点もはっきりと現れている。

ま と め

ウルリッヒ・フォン・ヴィラモヴィッツ-モエレンドルフ (Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff, 1848-1931) による『フィロロギーの歴史』 (*Geschichte der Philologie*, 1921, rev.1927)⁵⁷ が, アラン・ハリス (Alan Harris) によって英訳⁵⁸されたときに, 序文でオックスフォード大学のギリシャ語教授ヒュー・ロイド-ジョーンズ (Hugh Lloyd-Jones) が英訳のタイトルについてこのようなことを述べている。

The translation is called, 'History of Classical Scholarship'; but the original is called 'Geschichte der Philologie'. The translation could not be called 'History of Philology', because for most English people 'philology' has come to mean 'comparative philology', and 'comparative philology' means 'comparative study of language'. Yet if one uses terms exactly, linguistics is only one section of philology, a word which came into use in Alexandria as early as the third century before Christ and which properly

⁵⁷ Leipzig: B. G. Teubner.

⁵⁸ *History of Classical Scholarship* (London: Duckworth, 1982).

denotes the love of literature, of thought, of all that is expressed in words. This is the meaning of the word in the titles of the Philological Societies which flourish in Oxford and Cambridge, and this is its meaning on the Continent; it is deplorable that we in England have ceased to use this valuable term correctly. Strictly speaking 'philology' should not include the study of monuments, though it should include that of history and of philosophy. But Wilamowitz' account of it includes archaeology and art history, because for him philology was not separable from these disciplines. For Wilamowitz a student of philology must be a student of *Altertumswissenschaft*, 'the science of antiquity', a term invented by German scholars of the nineteenth century to describe the study, conceived as a unity, of everything connected with the ancient world. (vii-viii)

‘Philologie’を‘philology’と翻訳できなかつたのは、現今では‘philology’は‘comparative philology’を、そしてさらにこれは‘comparative study of language’を意味するようになり、そして‘the love of literature, of thought, of all that is expressed in words’という当初の意味が、イギリスでは用いられなくなってしまったからだとする。ロイド・ジョーンズはこのことを遺憾に思いながら、‘philology’の研究者は歴史・哲学・考古学・美術史などを含む「古代研究・古代学」(‘Altertumswissenschaft’)に携わる者でなければならないとするヴィラモヴィッツ-モエレンドルフの考えを引き合いに出している。ヒックスなどは典型的な‘Altertumswissenschaft’を追究したイギリスの文献学者である。ロイド・ジョーンズのこの言及(1982)から判断して、イギリスの「フィロロジー」への基本姿勢は現在もこの語が持つ伝統的な意味の線上にあると言えるだろう。そこには、抽象理論や論理的な体系の構築のみに傾倒する姿は見られな

い。というよりも、個々の言語事実を地道な資料収集やテクストリーディングを通して認識し、それを史的に追いながら全体像を見ることが主点とされる。この点で人間の思想・思考が表明された、一体としての「言語と文学」へ注目がなされるのは当然のことである。ましてや長い文学の歴史と伝統をもつイギリスが、語学の研究を文学研究の一部として行おうとした経緯も容易に理解されるであろう。イギリスの文献学の特徴はここにあると言える。

参考文献

- Auerbach, Erich, (tr.) by Ralph Manheim. 1965. *Literary Language and Its Public in Late Latin Antiquity and in the Middle Ages*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- Bailey, Nathan. 1753. *An Universal Etymological English Dictionary* 15th ed. London.
- Benson, Larry D. (ed.) 1987. *The Riverside Chaucer*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Burchifield, R.W. et al. 1989. *The Oxford English Dictionary* 2nd ed. Oxford: Oxford U.P.
- Chambers, R.W. 1959. *Beowulf: An Introduction to the Study of the Poem with a Discussion of the Stories of Offa and Finn*. 3rd ed., with a Supplement by C.L. Wrenn. Cambridge: Cambridge U. P.
- . 1935. *Thomas More*. London: Jonathan.
- . 1937. *The Place of St. Thomas More in English Literature and History*. London: Longmans.
- . 1926. *England before the Norman Conquest*. London: Longmans.
- . 1922. "The Teaching of English in the Universities of England." *The English Association*, Pamphlet No. 53.
- . 1928. "More's History of Richard III." *The Modern Language Review*, Vol. XXIII, No. 4, 405 - 423.
- . 1932. *On the Continuity of English Prose from Alfred to More and his School*. London: Oxford U.P., EETS OS191^A.
- Coles, Elisha. 1717. *An English Dictionary*. London: S. Collins.

- Damico, Helen (ed.) 1998. *Medieval Scholarship : Biographical Studies on The Formation of a Discipline*. Volume 2: *Literature and Philology*. New York and London: Garland Publishing.
- Douglas, David C. 1939. *English Scholars 1660-1730*. London: Eyre & Spottiswoode.
- Gneuss, Helmut. 1972. "The Origin of Standard Old English and Æthelwold's School at Winchester." *Anglo-Saxon England* 1, ed. by Peter Clemoes. Cambridge: Cambridge U.P., 63-83.
- Hammond, Wayne G. 1993. *J.R.R. Tolkien: The Descriptive Bibliography*. Winchester: St Paul's Bibliographies.
- Heyworth, P.L. 1989. *Letters of Humfrey Wanley: Paleographer, Anglo-Saxonist, Librarian 1672-1726*. Oxford: Clarendon Press.
- Hickes, George. 1703-05. *Linguarum Veterum Septentrionalium Thesaurus: Grammatico-Criticus et Archaeologicus*. Oxsoniæ : E Theatro Sheldoniano.
- Hoad, T.F. 1993. *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Johnson, Samuel. 1755. *A Dictionary of the English Language*. London, 1755; rpt. Tokyo: Yushodo, 1983.
- Kemble, John Mitchell. (ed.) 1833. *The Anglo-Saxon Poems of Beowulf, the Travellers Song, and the Battle of Finnesburgh* 1st ed. London: William Pickering; 2nd ed. 1835. London: William Pickering.
- . (tr.) 1837. *A Translation of the Anglo-Saxon Poem of Beowulf, with a Copious Glossary, Preface, and Philological Notes*. London: William Pickering.
- . (ed.) 1839-48. *Codex Diplomaticus Aevi Saxonici* 6 vols. London: English Historical Society.
- . 1849. *The Saxons in England : A History of the English Commonwealth till the Period of the Norman Conquest* 2 vols. London: Bernard Quaritch; 1876 rev. W. de G. Birch.
- Ker, Neil Ripley. 1957. *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon*. Oxford: The Clarendon Press.
- Koine, Yoshio (ed.) 1980. *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary* 5th ed. Tokyo: Kenkyusha.
- Konishi, Tomoshichi. 1994. *New Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary*. 2nd ed. Toyko: Shogakukan.

- Lee, Sidney (ed.) 1908 - . *Dictionary of National Biography*. London: Smith, Elder, & Co.
- Lewis, C.S. 1960. *Studies in Words*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Lloyd, Edward. 1895. *Lloyd's Encyclopædic Dictionary*. London: Edward Lloyd.
- Macaulay, Thomas Babington. 1855. *The History of England from the Accession of James the Second*, vol. III. London: Longman, Brown, Green, and Longmans.
- Matthew, David. 2000. *The Invention of Middle English: An Anthology of Primary Sources*. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press.
- McArthur, T. 1992. *The Oxford Companion to the English Language*. Oxford: Oxford U.P.
- Paul, Hermann. 1891 - 1893. *Grundriss der germanischen Philologie*. Strassburg: Karl J. Trübner.
- Richardson, Charles. 1855. *A New Dictionary of the English Language*. London: Bell and Daldy.
- Salu, Mary and Robert T. Farrel (ed.) 1979. *Scholar and Storyteller*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Sheridan, Thomas. 1780. *A General Dictionary of the English Language*. London.
- Smith, Jeremy. 1996. *An Historical Study of English: Function, Form and Change*. London and New York: Routledge.
- Stroh, Friedrich. 1952. *Handbuch der germanischen Philologie*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Thorpe, Benjamin. (tr.) 1830. *A Grammar of the Anglo-Saxon Tongue, with a Praxis by Erasmus Rask*. Copenhagen: Møller.
- . (ed. & tr.) 1832. *Cædmon's Metrical Paraphrases of Parts of the Holy Scriptures in Anglo-Saxon*. London: Society of Antiquaries.
- . (ed. & tr.) 1834. *Analecta Anglo-Saxonica: A Selection, in Prose and Verse, from Anglo-Saxon of Various Ages, with a Glossary*. London: Arch.
- . (ed. & tr.) 1844 - 46. *The Homilies of Ælfric, with an English Translation*. 2 vols. London: Ælfric Society.
- . (ed. & tr.) 1855. *The Anglo-Saxon Poems of Beowulf, the Scôp or Gleeman's Tale, and the Fight at Finnesburgh*. Oxford: Wright; Henry Parker.
- Walker, John. 1860. *A Critical Pronouncing Dictionary of the English Language*. Dublin: C.M. Warren, 1860.
- Wanley, Humfrey. 1705: Rpt. 1970. *Antiquæ Litteraturæ Septentrionalis Liber Alter seu*

Humphredi Wanleii. Librorum Veterum Septentrionalium, qui in Angliæ Bibliothecis extant, nec non multorum Veterum Codicum Septentrionalium alibi extantium Catalogus Historico-Criticus, cum totius Thesauri Linguarum Septentrionalium sex Indicibus. Anglistica & Americana 64, Hildesheim, New York: Georg Olms Verlag.

Watt, Robert. 1824. *Bibliotheca Britannica; or A general Index to British and Foreign Literature.* 4 vols. Edinburgh.

Whitney, W.D. 1904. *The Century Dictionary.* London: The Times.

Wilamowitz-Mollendorff, Ulrich von. 1921. *Geschichte der Philologie.* Leipzig: G.B. Teubner; Alan Harris (tr.) 1982. *History of Classical Scholarship.* London: Duckworth.

Wrenn, C.L. 1962. *Anglo-Saxon Poetry and the Amateur Archaeologist : The Chambers Memorial Lecture.* London: H.K. Lewis.

Wright, Thomas. 1842. *Biographia Britannica Literaria; or Biography of Literary Characters of Great Britain and Ireland : Anglo-Saxon Period.* London: John W. Parker, West Strand.

Ziolkowski, Jan (ed.) 1990. *On Philology.* The Pennsylvania State University Press.

網代敦. 1998. 「フィロロジスト J.M. Kemble(1)」 *Asterisk: A Quarterly Journal of Historical English Studies.* イギリス国文学協会編, Vol. VII, No.2, 111-122.

———. 1998. 「フィロロジスト J.M. Kemble(2)」 *Asterisk: A Quarterly Journal of Historical English Studies.* イギリス国文学協会編, Vol. VII, No.4, 264-280.

———. 2000. 「フィロロジスト J.M. Kemble(3)」 *Asterisk: A Quarterly Journal of Historical English Studies.* イギリス国文学協会編, Vol. IX, No.1, 30-39.

———. 2000. 「フィロロジスト J.M. Kemble(4)」 *Asterisk: A Quarterly Journal of Historical English Studies.* イギリス国文学協会編, Vol. IX, No.2, 95-131.

———. 2002. 「書評 *Medieval Scholarship : Biographical Studies on The Formation of a Discipline. Volume 2: Literature and Philology.* Edited by Helen Damico. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1998. xxvi + 465pp.」 *Asterisk: A Quarterly Journal of Historical English Studies.* イギリス国文学協会編, Vol. XI, No.2, 1-8.

小川浩. 2001. 「英語学と言語学の狭間——フィロロジーの立場から——」『英語青年』4月号. 東京, 研究社, 29-31.

小野茂. 2000. 『フィロロジスト : 言葉・歴史・テキスト』東京, 南雲堂.

- 齊藤勇. 1928. 『思潮を中心とせる英文学史』 第三版. 東京, 研究社.
 ソシュール, フェルディナン・ド; 小林秀雄 (訳) 1949; 1983. 『一般言語学講義』 東京, 岩波書店.
- 田島松二. 2001. 「英語学文献書誌を編纂して思うこと」『英語青年』11月号. 研究社, 30-32.
- 寺澤芳雄・大泉昭夫 共編. 1985. 『英語史研究の方法』 東京, 南雲堂.
- 中島文雄. 1956. 『英語学研究室』 研究社選書. 東京, 研究社.
- . 1932. 『英語学とは何か』 京城帝國大學法文學會『言語・文学論纂』 第二部論纂第四輯. 東京, 刀江書院. (復刻版, 1991. 東京, 講談社学術文庫.)
- 渡部昇一. 1962. 「文献学の理念と実践」『ソフィア』 第11卷第2号, 上智大学編集. 東京, 未来社刊行, 44-64.
- . 1990. 『イギリス国学史』 東京, 研究社.

Summary

‘Philology and Philologists in Britain (1) - (3)’

Atsushi Ajiro

What philology is and what philology should aim at have been variously discussed especially since the nineteenth century. Traditionally speaking, “die eigentliche Aufgabe der Philologie”, as August Böckh states in his *Encyclopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften* (1886), is “das Erkennen des vom menschlichen Geist Produzierten” or “das Erkennen des Erkannten”. Hermann Paul pursued this in his voluminous works *Grundriss der germanischen Philologie* (1891-1893) adopting the interdisciplinary approach. However, Ferdinand de Saussure criticized imperfection in philological studies saying that their objects were exclusively devoted to written or classical languages without paying any attention to living languages. The present linguists, who synchronically observe a language from a theoretical standpoint, denounce philology as having no clearly established methodology. Under these circumstances we need to reconfirm that philology is “love of learning and literature; the study of literature, in a

wide sense, including grammar, literary criticism and interpretation, the relation of literature and written records to history, etc.” as defined in the *OED*. That is why the purpose of philology is to describe and interpret literary and linguistic facts seen in texts in the past, and to link the past and the present through the results attained on the basis of historical investigation. Therefore, literary and linguistic studies should not be separated from each other.

Britain has produced many philologists who studied languages with much literary, historical and cultural interest, relating them closely to humanistic aspects. The first English philologists in Britain were “Æthelwold and his circle in Winchester”(Gneuss, 1972) writing in the Old English period and the most important one was the prolific writer Ælfric, whose works dealing with extensive themes can be considered as philological. The period ranging from the sixteenth to the nineteenth century saw the appearance of the three greatest philological scholars who laid the basis for medieval studies: Lawrence Norwell, George Hickes, and Humphrey Wanley. They collected medieval English manuscripts, catalogued them making a detailed description of their contents, and offered future textual critics the opportunity to publish texts. Their scholarship including textual criticism shows comprehensiveness not limited only to the areas of language and literature. Thomas Warton, writing in the eighteenth century, brought out *The History of English Poetry*, in which he revealed what the nature of the change of the English language was producing diverse late Middle English and early Modern English poems as evidence.

There are many other important philologists to be noted, but as representative ones maintaining traditional philological attitudes I took notice of the literary and linguistic accomplishments of two scholars: J.R.R. Tolkien and R.W. Chambers. Their stance on language and literature is embodied in the following statements: “The right and natural sense of Language includes Literature just as Literature includes the study of the language of literary works.” (1959) and “in speaking of Philology at University College, I wish to use the word in the older, broader, and more correct sense, including the study of literature as well as the study of language.” (1939) respectively. Nowadays the study of language tends to be divorced from the study of literature and academic sectionalism to prevail. It is required that we should return to the original meaning of “philology”, and cast our eyes once more on the traditional British attitude toward philological studies.